2．嘉納治五郎の外国語学習

東京外国語大学　東　憲一
東京外国語大学　飯島　啓子

2．Kano Jigoro's Foreign Language Learning

Ken-ichi HIGASHI　(Tokyo University of Foreign Studies)
Keiko IIJIMA　(Tokyo University of Foreign Studies)

Abstract

Kano Jigoro (1860-1938) was the founder of Kodokan Judo and an educator serving as president of Tokyo Higher Normal School for years. He also continued to serve in various positions as member of the International Olympic Committee. He had been abroad for 13 times in his lifetime, out of which nine times were to the United States and Europe and four times were to Qing Dynasty or the Republic of China. The purpose of the travel was to promote Judo and participate in Olympic Games and international conferences. It has been often said that the productive result of his each visit was contributed to Kano's high foreign language ability.

The aim of this study was to analyze and discuss facts concerning Kano's foreign language learning and to apply the results to further studies of Kano Jigoro. The approach of the study was by extracting and analyzing the facts concerning Kano's foreign language learning appeared in his literary writings.

The results of the study concluded as follows regarding Kano's foreign language learning;

1）He mainly used English when he communicates with foreign people. He also spoke French and German and was able to communicate with Chinese through writing.

2）He learned English and German in private schools from when he was 13. He majored in English in a national language school from 15 years old. At the year of 18, he entered The University of Tokyo, where he learned English from foreign teachers. His English skill was mainly developed during this period.

3）Kano started to learn Chinese from 11 years old. He also learned it in evening classes at The University of Tokyo. Those enabled him to write Chinese.

4）Like Kano said himself, his English ability had been improved through visiting foreign

countries and welcoming foreign guests in Japan.

5）He made various proposals for improving English education in Japan.

6）By comparing Kano's overseas travels and his statements on leaning foreign languages chronologically, very interesting results have appeared.

From the result of the analysis indicated above, it has been shown that Kano's foreign language learning is deeply related to his experiences of using foreign languages in and out of Japan. The results added another research questions for future studies.

1．はじめに

嘉納治五郎（万延元年：1860年～昭和13年：1938年）については一連の拙稿及び共同著作・共同発表により主に教育の面から検討を行ってきた。それらの中で嘉納を巡る事柄に外国語に関する記述が多く見られた。嘉納治五郎の柔道、教育、スポーツに係わる海外渡航は延べ13回にわたる。それらの海外渡航において嘉納の外国語能力（英語、ドイツ語、フランス語、中国語：筆談）が優れていたことは定評のあるところである。嘉納はどのようにして国際的に通じる外国語能力を身に付けたのであろうか。また、数多くの経験に裏付けされた外国語についての見識はどのようなものであろうか。それらのエピソードは嘉納自身のみならず、第三者による見解も多く見られる。

本研究は嘉納の外国語の学習について時系列的に見た様々な嘉納の見識や言説の検討を行うものである。表題を敢えて英語学習としないで外国語学習としたのは、嘉納が得意とした英語に関する、読む、書く、話すだけでなく、他にも幅広い外国語学習に関する嘉納の見識が見られたからである。本研究の課題である嘉納の外国語学習のみならず外国語学習の関連事項、国際化についての嘉納の見識や言説が得られると考えられる。また、本研究により嘉納の外国語学習を通じて得た国際人嘉納の新たな人となりを知りたいと考える。

嘉納治五郎の発言・著述は公益財団法人講道館の監修のもとに編纂された嘉納治五郎大系全14巻[1]に多く収められており、主にそれらを基として嘉納の外国語学習に関連する事項を時系列的にまとめ、分析と検討を行った。

2．嘉納の外国語を巡る様々な事例

2．1　嘉納の外国語学習事始め（三叉学舎、育英義塾）：明治５年（1872年）～明治６年（1873年）。13歳～ 14歳。

嘉納は出身地神戸に於いて７歳から11歳までの間、私塾で漢学、習字を学んでいる。嘉納は裕福な家庭環境と父親の教育方針もあり、学習環境は幼少の頃から整えられていたと考えられる。嘉納の外国語学習は明治５年（1872年）13歳の時、適塾出身である神田の箕作秋坪の洋学私塾である英学塾・三叉学舎（明治元年：1868年創立）に通学し、英書を学ぶことから始まった。箕作秋坪は儒者の子として文政８年（1826年）備中（岡山）に生まれ、江戸幕府蕃書調所に務め、文久遣欧使節の一員となった。箕作は森有礼が提唱し、西村茂樹、福沢諭吉、西周等が参加した近代的啓蒙学術団体である明六社の一員である。三叉学舎は福沢諭吉の慶應義塾と双璧をなす英学塾であった。箕作は後に東京高等師範学校の前身である東京師範学校の摂理（明治７年:1874年～明治10年:1877年）を務めている。嘉納が後に高等師範学校校長（明治26年：1893年～明治30年：1897年）、東京高等師範学校校長（明治30年：1897年～明治31年：

1898年、明治34年：1901年～大正９年：1920年）を務めていることから見ると、嘉納は箕作の三叉学舎で英語を学ぶのみならず、箕作や明六社の思想的影響を受けていたことが考えられる。

その後、明治６年（1873年）14歳の時、芝烏森の育英義塾（学校）に於いて英語、ドイツ語、数学を学ぶ。育英義塾は有栖川宮熾仁親王（天保６年：1835年～明治28年：1895年）により創設された。「東京府における私立学校の設置状況（明治６年５月～６月）」[2)]によると校主有栖宮（家令藤井希璞）とある。学科は英学、独学である。育英義塾に於ける嘉納の見識を紹介する。「この塾にはオランダ人が教頭をしており、ドイツ人が助教ですべての学科を英語で教えていた。自分はその以前箕作秋坪の塾に通うて、いくらか英書を学んでいたから学科の上では他人に遅れをとるようなことはなかったけれども・・・」[3)]と嘉納は述べている。このことから嘉納は自宅から通った三叉学舎で英語を学び、すべての学科を英語で教えていた育英義塾では十分に通用する英語の実力を付けていたことが伺える。

幕末に於ける藩校などの公的教育機関は従来の藩校に於ける教育内容に加え洋学を入れたものになった。従来の蘭学は新しい洋学（英語、ドイツ語、フランス語）に取って代わって行ったが、英語学習や英語を基にした普通学を学ぶ傾向にあった。また、庶民を対象にした私塾は年齢、階層など様々なものが見られた。明治初期になると、明治５年（1872年）に学制が公布されるまで様々な目的の多くの私塾が誕生した。嘉納が学んだ三叉学舎、育英義塾はこれらの私塾の英学塾の一つである。これらの私塾は現在の大学、高校などの起源とされるものが少なくない。三叉学舎、育英義塾らの私塾に限ることではないが、英学学習は英書を用い、英書による普通学を学ぶことであった。昨今、英語による授業科目が各大学や高校で見られるが、嘉納が英語を私塾や学校で学んだ時代は英語の授業は英語によるものが主であったし、それ以外の授業も英語で行うことが普通であったから、昨今の英語教育の方法は何も真新しいことではないかもしれない。明治初期、英学の教師の能力も様々であり、英語辞書も十分でなく、英語の学習内容も確立されたものではなく各私塾で様々な内容であったことからすると嘉納の英語学習はかなりの努力を要したことが考えられる。このことは英語以外の外国語学習と同じことが言えよう。

２．２　東京外国語学校、東京英語学校、開成学校、東京大学に於ける外国語学習：明治７年（1874年）～明治15年（1882年）。15歳～ 23歳。

明治７年（1874年）15歳の時、東京外国語学校入学。英語及び普通学を学ぶ。後に英語科が分離して東京英語学校に。明治８年（1875年）東京英語学校卒業。同年官立開成学校入学。明治10年（1877年）開成学校が改称し東京大学に。同大学文学部第一年に編入される。明治14年（1881年）、東京大学文学部政治学及び理財学卒業。文学士。同年、文学部道義学及び審美学科に編入。明治15年（1882年）23歳の時、文学部道義学及び審美学科を卒業。以上が嘉納の公的な学校に於ける外国語学習の経歴である。

以下、「東京外国語学校史　外国語を学んだ人たち」[5)]を参考・引用することにより、東京外国語学校、東京英語学校に於ける嘉納の英語学習の内容を検討する。東京外国語学校の開設にあたっては明治初期の混乱もあり、試行錯誤、紆余曲折の連続であった。２．１．嘉納の外国語学習事始め（三叉学舎、育英義塾）で述べたように学制が定められていない幕末から明治初期に掛けての英学を中心にした外国語学習は人気があった。明治５年（1872年）に学制が公布され、東京外国語学校にも受験生が集中した。当時の受験科目を知ることが現在は出来な

いが高い倍率であったことは予想される。

明治７年（1874年）２月８日付文部省布達により、東京外国語学校は志願者（13歳以上18歳未満）を募集した。嘉納は志願者該当年齢である。結果、当時の英語学生徒名簿によると、英語学　上等六級１名（官費生１名）、下等一級25名（官費生12名）、二級30名（官費生６名）、三級44名、四級35名である。英語学生徒は他の仏語学、独語学、魯語学、清語学を含めた全体の内70％を占めた、英語が何故主要学科になったかと言うと、当時の官界、商工界の中心はイギリス人、アメリカ人であった。また、卒業生の進学先の東京開成学校の教授用語が英語であったからである。

英語学の授業内容は読方、会話、文典、書取、作文であった。また、算術、歴史、地理の授業も英語で行われた、特に、重視されていた読方と同じ時間数が算術に配分されていたことは興味深い。後に嘉納が普通学を重視をしている言説がよく見られるが、これらの言説の基盤になっているのは三叉学舎、育英義塾における語学以外の普通学授業科目の履修によるものと考えられる。また東京外国語学校、東京英語学校でも同様に普通学を重視していることによるものであろう。東京外国語学校の英語学は明治７年（1874年）に東京英語学校として分立した。東京外国語学校の英語学教員、生徒はそのまま移籍した。この後、嘉納は東京開成学校、東京大学へと進学することになる。当時の学制は試行錯誤、紆余曲折の連続であったことは前述の通りであり、東京英語学校は後に東京大学予備門となり東京大学に付属される。東京外国語学校は後に更なる紆余曲折を経ることになる。

本稿に於いて注目すべきは東京外国語学校、東京英語学校、開成学校、東京大学に於ける英語学習については英語学のみならず他の専門科目、普通学の授業も全て英語で行われていたことであろう。嘉納の英文日記執筆や海外渡航時に於ける英語をはじめとする外国語能力、及び後の項で述べる外国語学習に関する見識や言説は三叉学舎、育英義塾での基礎的な英語学習を基に東京外国語学校、東京英語学校、東京大学に於ける更なる英語学習によって培われたと言っても過言ではないであろう。

最後に「東京外国語学校史　外国語を学んだ人たち」[5]中の「東京英語学校の分立と英語名人世代」の章に着目したい。英語の視点から見ると嘉納と同世代の東京英語学校の生徒には次のような人物がいた。以下、引用を要約して紹介したい。

- 岡倉覺藏（天心）：東京大学でフェノロサに学び、日本美術の再興を果たした。英文による「茶の本」を執筆。
- 田中館愛橘：ローマ字論者である。後に嘉納もローマ字問題に参画しているが、田中館と関係があることは言うまでもない。
- 新渡戸稲造：英文の「武士道」の執筆者である。
- 内村鑑三：英文「余は如何にして基督信徒なりし乎」の執筆者である。

この他にも日本の指導者となった人物が数多く見られる。

嘉納についても前掲書[5]に　記載されているので以下、同じく引用を要約して紹介したい。

- 「嘉納伸之介（治五郎）：嘉納伸之介（治五郎）は末松兼澄と同級生。東京英語学校が東京大学予備門になった十年（明治十年）ころ、腕力自慢の土佐出身の男に気に入らぬ奴だとひどく殴りつけられたが、手向かえなかった嘉納は、くやしくてならず、柔術を習い覚えたという。東京大学の政治科および理財科を卒業、さらに哲学科専科を修了。学習院教授、第五、第一高等中学校長、文部省普通学務局長、東京高等師範学校長などを歴任したが、講道館柔

道の創始者として有名になった。」「末松兼澄は伊藤博文の娘婿。逓信大臣、内務大臣、枢密顧問官。文学者。子爵である。」

前掲書[5]中、「英語と日本人」[6]によると、「右記の人たち（東京英語学校の分立と英語名人世代）はみな英語にはとびきりの実力があった。・・（中略）・・内村鑑三、新渡戸稲造、岡倉覺三・・（中略）・・、日本人として最も深く英文を身に付けた人間と見なしうるこれらの三人とも、内村が1861年生まれ、新渡戸と岡倉が翌62年生まれ、というように全く同世代の人間である・・・。このことは偶然ではない。1861年から前に２、３年、後に４、５年くらいの合計10年ぐらいの期間に生まれて、高等教育を受ける機会に恵まれた人々が、実は近代日本で最も英語（または他の欧語）を身につけたグループであると思われるのだ。この人たちは東京外国語学校英語学、引き続いて東京英語学校で、いわゆる正則英語を徹底的に教育された。」これらの人たちを「英語名人世代」と述べている。因みに嘉納は1860年生まれであることからして、英語名人世代である。嘉納の英語の実力及び外国語教育の言説・見識もこの英語名人世代によるものであろう。

２．３　嘉納の外国語及び外国語学習に関する見識と言説（刊行順）

１）清国巡遊記考中、張之洞との密談（筆談）[7]より。明治35年（1902年）。43歳。

清国を訪れた際、武昌で張之洞と筆談による密談を行った。これは幼少の頃から木沢某のもとで漢学を修めたり、生方桂堂の成達書塾で書を学んだりしたことが基礎となっていることが考えられる。また、青年期に二松学舎塾で漢学を修めたこと要因になっていると考えられる。

２）「外国語を練習せよ」[8]より。大正２年（1913年）。54歳。

「外人と親しく交わり、互いに意思の疎通を図るがためには、どうしても外国語に習熟しなければならぬ。経験によれば、一人で二カ国や三カ国の国語を使うことくらいは決してむずかしくない。しかし一般の国民に向かって外国語を練習せよとはいわぬ。外人に接するべきある範囲の人々にこれを奨励するのである。・・・外国語の修養はきわめて必要である」。嘉納の外国語教育に対する言説である。

３）「結語」[9]より。大正２年（1913年）。54歳。

「他国と融和を図る手段としては、品性を高尚にし、外国語を習熟するということを等閑にしてはならぬ」。外国語学習の心構えと考えられる。

４）「師範学校教育上特に注意すべき二、三の事項について」[10]より。大正３年（1914）年。55歳。

「予は、北米合衆国に限らず、何国へ行くにしても、いやしくも海外に行く日本人は必ず、日本たる精神を失わず、日本国を愛し、または文物を慕うべきことをあくまで望むのであるが、それと同時におのれの行った国の言語に通じ、法律に従い、風俗習慣を心得、日本の紳士たるとともに、その国の人からも紳士の行動に外れない人だと見られるようにすることを望むのである」

５）「なぜ日本人は排斥されるのか」[11]より。大正５年（1916年）。57歳。

「第一、言語は海外に行く以上はその行った国の言語を覚え、その国の法律風俗習慣に遵うと同時に、その国の言語を使わなければならぬ。従来海外に行った日本人は、往々其の土地の風俗習慣を顧みないばかりでなく、全くその土地の言語を解せず：、まれには日本人間にも許されぬような野卑な所行をあえてして排斥に至った例もないでない」。４）、５）は嘉納の外国語と国際感覚の提言を述べた一例と言える。

6）「追懐瑣談」[12] より。大正10年（1921年）。62歳。

要約として箕作秋坪の三叉学舎に於ける英語学習についての言説である。英語文法書のみならず英語で行われる地理物理の授業も輪講したことについて述べている。また、育英義塾では英語で歴史の授業や、ドイツ語を習った。また、数学などはオランダ語の書物から出題された。「一面にはかくのごとく非常に無駄なことをしたが一面にはまた非常な勉強をしたので、その間の苦心ははなはだ物になったと思っている。これが後に及んでいかなる困難なことにも屈することなく、努力して事に当たるという気概を養ってくれたと思う」。これは当時の外国語学習の状況を示すものであろう。要約として東京大学に入ってからは当初は勉強もしたし、学課においても優等な成績を得ていたが、卒業する間際になっては運動を主として学科は第二としたので勉強と運動が相反していた。」

ここに於ける運動は講道館柔道の基になった柔術修行のことを示すと考えられる。

7）「我が国の国際関係における現情と将来の方針」[13] より。大正10年（1921年）。62歳。

A．孤立の現状とその原因。「・・・邦人の語学の不十分な結果、欧米人から蔑視される場合も少なくない。すなわち、邦人が外人に対して意見を発表する場合、語学が不十分であるために所壊を尽くすことが出来ぬので、いかにも識見が乏しいように誤解されるのである・・・。」

B．外国語教育の改善。「・・・我が国今日の国際的孤立の事情に鑑みると、外国語教育の改善が急務中の一つであるといわねばならぬ。由来日本語と欧米諸語の言語とは発言においても、語の組織、文の構造においても著しく相違しておって我々日本人にとって外国語の修得は容易ではない。・・・実用的な外国語であるべき。・・・現今の外国語教育は、この方面に多大の欠陥を有っていると思う。全ての国民に外国語が必要ではない。・・・将来外国語を用うべき者としからざる者を区別して教育するのがよい。用うべき者は時間数を居増やし、英語倶楽部のような国交と語学練習を学べる所を設置すべき。しからざる者は国語をによって知能を磨き思想を練らしめるがよい。外国語を学ぶ際は親切心も含めて学ぶべきである。」

以上の言説は、嘉納の海外体験によるところが大きい。この項に於ける嘉納の言説は、現在、日本に於ける英語の早期教育の論議に一考の示唆を与えていると考えられる。

8）英国皇儲殿下歓迎文：英文[14]。文学的表現の見られる文章である。大正11年（1922年）。63歳。

9）「我が国の国際的位置を高むる上に英語はいかなる職能を有するか」[15]。大正14年（1925年）。63歳。

要約として、外国人に日本文化を学ばしめ習わしめようと思ってもその任に堪えるだけの英語が出来る人が幾人あるか。・・・世界に日本の文化を紹介するには英語に限らず独語、仏語も可なり。世界の優大な国は米英二国である。学術研究においても、一種の外国語を学ばんとすればやはり英語を択ぶを適当とする。英語教育の普及を図るには１．英語会館の設置、英語を使う場所を考えることである。これはチェコスロバキアのプラハに行ったときの経験を基にしている。２．英語の教授を幼少期からはじめ必要がある。すべての学校において英語を重視する必要はない。また個別に応じた英語授業の比重を考慮すべきである。３．教室における英語の時間を増やさなくとも日常の生活の中で読む、書く、話すの練習をすることである。心掛け一つで上達する。４．教員の学力と教授法の向上。講習会、英語会のようなものを設けて教員の資質の向上を図る。

10）「柔道家としての嘉納治五郎」[16] より。昭和２年（1927年）。68歳。

要約として、育英義塾に入った時の思い出を語っている。箕作秋坪の三叉学舎で英書をいくらか学んでいたから、オランダ人が教頭で、ドイツ人が助教で英語で教える育英義塾に入っても学科では他人に遅れをとるようなことはなかった。三叉学舎と育英義塾での授業内容や様子のことを語っている。

11）「海外渡航に際して志しを教育・宗教に傾く」[17] より。昭和４年（1929年）。70歳。

「・・・自分は、大学でも仏語をやっていたが、まだ不十分であったからベードン氏について仏語を習いながら・・・」。嘉納が仏語を勉強していた一つの証である。

12）「外国語の練習」[18] より。昭和４年（1929年）。70歳。

長い文章になるが、嘉納の外国語学習に関する見識であるので一部引用する。「外国語の練習も一つ感じたことは、日本に居ることは外国語に文法を破らず、不適当なる語を用いず、発音も正しくしようと努めたから、会話にひどく気苦労した。・・・間違ってもドシドシ使っていればついには間違えないようになる。語学は使いなれるべきものと考えて、その後は以前よりは誤りがあっても臆せず思うことを楽にいい表せるようになってきた。もちろん語学は誤りなきを期すべきであるが、引っ込み思案で、書かず語らずにいたなら、いつまであっても上達はしないものである」

嘉納は幼少の頃から正式な外国語教育を受けてきたが、この項に於ける年齢は70歳である。延べ13回の海外渡航経験や国内外での多くの外国人との語学体験等から得た外国語学習の総括的な見識と考えられる。

13）「世界の優秀国民間の競争において日本人が勝ち得る唯一の方法」[19] より。昭和８年（1933年）。74歳。

表記の演題に関する内容について欧州に於ける旅行談から述べている。ドイツに於けるラジオ出演の話として、「私は片言くらいなら出来るがあまり上手なドイツ語ではない、それで話が下手だからというて断ると、下手でもよいからやれというのでとうとうラジオの前にたたされてしまった。・・・ドイツに居る日本人に自分が来た使命を日本語でやる。これを放送時間の三分の一に当てる。次の三分の一はベルリン及びドイツについての感想を、これはドイツ語でやる。残りの三分の一は今後世界に呼びかけようとする私の主義を英語でやる・・・」。この項より、嘉納は仏語のみならずドイツ語も修得していたことが伺われる。

14）「嘉納師範に柔道を聴く」[20] より。昭和９年（1934年）。75歳。

東京文理科大学講師エイ・エフ・タマスによる聞き書きの訳文である。「嘉納師範は流暢な生々とした英語で相手に好感を与えながら話を運ばれるし、また独仏両語をも、英語同様スラスラ話されるということを知っていたので・・・師範のように流暢に英語を話そうとすれば、少なくとも七、八年は英米に滞在することが必要であろう」。本文は日本郵船旅客課発行の月刊英文雑誌「トラベル・ブルテイン」に掲載されたものであるが、嘉納の外国語能力を示したものといえよう。

15）「柔道の根本精神」[21] より。昭和11年（1936年）、77歳。

「仏文で書いたものもあるからそれで見てくれという。仏文も私はよく出来ぬけれどどうにかこうにか大体の意味を取るくらいは分かる。それで読んだところが大分間違っている。いろいろ指摘した」。嘉納の仏語能力に対する謙遜であろう。

16）「修業時代追懐談」[22] より。昭和11年（1936年）、77歳。

育英義塾時代の話として、「・・・ライヘというオランダ人の教師がいた。この先生は数学が得意で、いろいろの題を出しては数学の練習をさせたものである。問題はオランダの書物から出して教場で題を解かせる。書物はオランダ語で書かれているのでオランダ語の辞書を購め・・・。ライヘ先生は英、独、仏の各国語にも通じていたが、発音が悪く・・・。後に外国語学校に入って英国人や米国人に就いて習ってみると発音が大変な違い、そこで更めて発音の勉強をしたので、それが後日、大変役に立った」。嘉納は英語、独語、仏語だけでなくオランダ語にも精通していたことが伺われる。

また、嘉納は辞書のことを述べている。「英和辞書はあったが和英の辞書は高価で買わなかったとある。不便な中に勉強した。今日は教師もよく、書物も便利になったが、それがために辛苦して練り鍛えようという気風が一般の学生から減じたように思われる」。辞書不足の問題ではかなり苦労したようである。現代とは外国語学習の方法、内容とも隔世の感がある。

嘉納の外国語学習に関する言説は、「嘉納先生伝」[22] にも散見される。前述と重複する内容も見られるが、前述には見られない内容を挙げて紹介する。

17)「嘉納先生伝」[23] より。昭和16年（1941年）。嘉納没後。

「先生の少壮時代は、外国語および漢文習字の習得には、もっとも力を注ぎ、読み、話し、書くとともにその鍛錬に勤めたのであった。漢文においては、他日、支那と筆談するにも[24]、いささかの渋滞を見ざるのみならず。筆跡の妙なるは支那人を敬服せしむるに足り、しかも一方、英語に堪能なるはすでに世間に知らるるが、書生の時より、友人に送る書翰も英文を用い、日記は老年に至るまで、しばしば、英文を用いたのは、学生時代の鍛錬に始まり、終生その習慣を持続したのであった」。嘉納の生涯英語学習に対する取り組みの一例である。

「そのころ、都築[25]、嘉納などは英語の達人として聞こえたが、語は都築氏が一番巧みで、英習字は嘉納さんが一番だという評判だった、といわれた。」

嘉納の外国語及び外国語学習に関する見識や言説を刊行順に挙げたが、以上のことより以下のように総括できると考えられる。

「２．１の外国語学習事始め」や、「２．２　東京外国語学校、東京英語学校、開成学校、東京大学に於ける外国語学習」は幼少から外国語を学んだことが中心である。辞書も少なく不断の努力を要した外国語学習であった。「辛苦して練り鍛えようという気風が一般の学生から減じたように思われる」[22] と述べているが、勉学のみならずその後の柔道修行にも相通ずるものがあると考えられる。柔道修行との精神論との関連の考察についてはまたの機会を待ちたい。幼少期から外国語学習の機会を得たことと、嘉納の勉学に真摯に取り組む姿勢が外国語学習の結果を生んだと考えられる。また幼少の頃から、普通学を英語などで学んだことは、後に多く語られる普通教育重視の姿勢と国際感覚豊かな嘉納の教養の土壌となったことは言うまでもない。また、東京外国語学校、東京英語学校、開成学校、東京大学の同窓生、同級生の人脈は後の嘉納の仕事に生かされ、登場することになる。

嘉納の外国語学習や国際感覚についての見識や言説は多くの内容が見られる。要約すると「外国語学習については万人に完璧な外国語学習は必要なく、外国語学習を必要とする人を対象に重点化するべきと述べている。完璧な外国語学習を必要としない人の残りの時間は他の学習時間に割くべきであると述べている。英語倶楽部のような国交と語学練習を学べる所の設置と教員の語学研修を提言している。」また、「外国に行った場合には、日本たる精神を失わず、日本国を愛し、または文物を慕うべきことをあくまで望むのであるが、それと同時におのれの行っ

た国の言語に通じ、法律に従い、風俗習慣を心得、日本の紳士たるとともに、その国の人からも紳士の行動に外れない人だと見られるように外国語学習と共にその国の慣習に従うべき[10)]」と述べている。日本人であるを忘れず、その国に行ったらその国の風俗習慣等に従えということであろう。

以上が「嘉納の外国語及び外国語学習に関する見識と言説」の総括である。

3．おわりに

嘉納が主に運用していた外国語は英語であるが、他にフランス語、ドイツ語も運用していた。他に筆談による中国語、幼少の頃学んだオランダ語などがある。嘉納の外国語学習の基礎は幼少の頃の私塾とその後の官立の学校で学んだことにより培われた。嘉納の外国語能力は延べ13回にわたる公務海外渡航や国際会議等、また人々との出会いにより向上したと考えられる。また、国内に於いても講道館を中心とした外国人来訪者が多く見られた。このような外国語学習や体験を通じて外国語教育や国際感覚の持ち方についての様々な提案を行っている。嘉納の外国語学習の姿勢は柔道修行や嘉納の理念に通じるものがあると考えられる。嘉納の外国語学習や国際感覚の規範は欧米を中心としたものであり、アジアを対象・規範とした記述は見られない。そのような傾向は弘文学院設立、明治35年の清國巡遊等にも見られた。明治以降、欧米を規範としてきた日本としては致し方ないことではあったろうが、その中でも嘉納は日本人としてのありようを説いている。以上のことより、嘉納の柱である、柔道、教育、スポーツは嘉納の外国語能力によって発展したことは言うまでもない。国際化が叫ばれている現在、国際人である嘉納から学ぶことは多いと考えられる。今後、嘉納の外国語教育については、嘉納の私塾である嘉納塾や弘文館等に於ける外国語教育や未発見の資料を収集し検討したい。

註

1）講道館、1988「嘉納治五郎体系」全14巻、本の友社.
2）庶務掛学務取扱、「私立学校明細調　明治６年５月調」、東京都公文書館
3）嘉納治五郎、1983「嘉納治五郎」著作集　第３巻」五月書房、PP. 9
4）宮永孝、1999「幕末・明治の英学」社会志林46（2)、法政大学
5）野中正孝編著、2008「東京外国語学校史　外国語を学んだ人たち」、不二出版.
6）太田雄三、1981「英語と日本人」、TBSブリタニカ.
7）随行員老谷、明治35年「嘉納會長清國巡遊記」國士、第６巻中.
8）嘉納治五郎、大正２年「教育之実際」７（7）中.
9）前掲書８）
10）嘉納治五郎、大正３年「中等教育」20号、中等教育研究会.
11）嘉納治五郎、大正５年「柔道２（6)」.講道館文化会.
12）嘉納治五郎、大正10年「教育」457号、茗渓會事務所.
13）嘉納治五郎、大正10年「中等教育」38号、中等教育研究会.
14）嘉納治五郎、大正11年「大勢」１（１)、講道館文化会.
15）嘉納治五郎､大正14年「我が国の国際的位置を高むる上に英語はいかなる職能を有するか」、大正14年「中等教育」53号、中東教育会.
16）嘉納治五郎、昭和２年「作興」６（１)、講道館文化会.

17）嘉納治五郎、昭和４年「作興」８（４）、講道館文化会.
18）嘉納治五郎、昭和４年「作興」８（５）、講道館文化会.
19）嘉納治五郎、昭和８年、茗渓会館における歓迎席上の講演より。
20）嘉納治五郎、昭和９年「柔道」５（７）、講道館文化会.
21）嘉納治五郎、昭和11年「柔道」７（１）、講道館文化会.
22）丸山三造編著、昭和14年「大日本柔道史」、講道館.
23）横山健堂、昭和16年「嘉納先生伝」、講道館.
24）東憲一・飯島啓子、2012「嘉納治五郎清國巡遊記考　其の一　」『日本武道学会』中、明治35年（1902年）。43歳、清国巡遊記考中、武昌で張之洞と筆談による密談を行った。
25）都築。都築馨六。開成学校を経て東京大学卒業。官僚、外交官、枢密顧問官。

参考文献

１）東憲一、1992「嘉納治五郎研究の動向と課題」『東京外国語大学論集』、45号：pp.129-139.
２）東憲一、1995「学校教育における嘉納治五郎」『東京外国語大学論集』、50号：pp.1-12.
３）東憲一、1995「熊本における嘉納治五郎とラフカディオ・ハーン」『東京外国語大学論集』、51号：pp.187-202.
４）東憲一、1996「嘉納治五郎と柔道、教育、スポーツのかかわり」『東京外国語大学論集』、52号：PP.199-209.
５）東憲一、1996「嘉納治五郎と臨時教育会議」『東京外国語大学論集』、53号：pp.99-113.
６）東憲一、1997「臨時教育会議にみる嘉納治五郎の体育思想」『東京外国語大学論集』、54号：PP.23-35.
７）東憲一、1997「貴族院における嘉納治五郎」『東京外国語大学論集』、63号：pp.99-113.
８）東憲一•村田直樹、1999、「臨時教育会議にみる嘉納治五郎」『講道館柔道科学研究会紀要』、第８輯、pp.11-22.
９）東憲一、2002「嘉納治五郎再考」『Symposion』、ドイツ語学文学研究会編、Nr.17：pp.45-54.
10）東憲一、2011「嘉納治五郎の啓蒙雑誌『國士』」『東京外国語大学論集』、83号：pp.353-362.
11）東憲一、2012「新民叢報第二三号にみる嘉納治五郎の教育思想」、『総合文化研究 2010-2011』、14-15：pp55-63.
12）東憲一、2012「嘉納治五郎の啓蒙雑誌の変遷」『東京外国語大学論集』、84号：pp313-324.
13）東憲一•飯島啓子、2013「嘉納治五郎清國巡遊記考」『講道館柔道科学研究会紀要』、第十四輯：pp31-39.
14）東憲一•飯島啓子、2011「新民叢報に見る嘉納治五郎の教育思想－第２３号について－」『日本武道学会第44回大会号』、62.
15）東憲一•飯島啓子、2012「嘉納治五郎清國巡遊記考　其の一　」『日本武道学会第45回大会号』、16.
16）東憲一・飯島啓子、2014「嘉納治五郎清國巡遊記考　其の二　－北京に於ける交友関係を中心にして－」『日本武道学会第47回大会号』、12.
17）村田直樹、2013「嘉納治五郎師範の国際的活動と思想について」平成25年全日本柔道選手権大会プログラムpp48-52.